

# 章牙

地球の皮膚のような千両の表面、人間の皮膚でも同じで、被写体ももってる、表面のマチエルに惹かれる。だから私、彫刻家になったほうがいいと思うくらい、手ざわり感がすきで、触覚的なんです。被写体と向き合ると、問題意識、原爆なら原爆とは別次元で、やっぱりそのものに惹かれてしまう。

ASHIKABI 2001.7 27

66

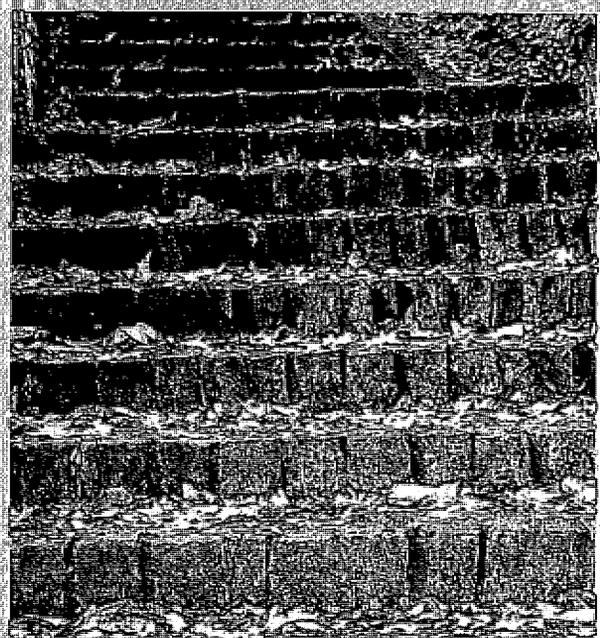
## 対談 撮ることと言葉

「長崎マンダラ」展にみる日本論の再構成 □ 東松照明・中里喜昭

二十一世紀における社会主義と日本国憲法の命運 □ 田口富久治

方便の門を開く異形の神 □ 音楽有「聖水」論 □ 中野信子

小説 アフリカから吹いてきた風 □ 牧 梶郎



# 本・文学と思想

『戦後日本政治学史』

加藤哲郎

『取り替え子チェンジング』

山根 献

『闇を拓く光』

上原 真

『暗き時代の抵抗者たち』

長野芳明

『歴史のなかの中国文化大革命』

牧 梶郎

『囚われ人 アントニオ・グラムシ』

森川貞夫

『熊の敷石』

吉田悦郎

## 田口富久治 『戦後日本政治学史』を読む

### 私的断想

田口富久治著 『戦後日本政治学史』

加藤 哲郎

藤田省三「精神史的断章」(平凡社、一九八二年)中に、「市村弘正『都市の周縁』をめぐって」という絶品がある。「伝統と現代」七八年一月号に掲載された市村弘正の論文をレビューしながら、「読む」という行為の意味と、そこ

での思想的緊張を教えて、味わい深い。たとえば引用の仕方。江戸末期の「裏店」を描くに際して、市村が引用したのは武陽隠士「世事見聞録」と寺門静軒「江戸繁盛記」の二冊のみだった。だが藤田は

「私たちは、市村氏がこの二冊だけしか読んでいないなどという表面的な判断を下してはならない。総読書目録を全ゆる場合に開陳していい気になる風習を持つアカデミシヤンは、とかく鈍感にもそういう軽率な即断をしやすいものであるが、……もし行文の一行一行の中に包み込まれている含意の程を読み取るなら、この論文のこの章の中には、引用されている二冊の代表的な書物の他に、戦前の江戸社会の研究者を始め最近の専門史学者に至るまでの諸調査がちゃんと取捨選択されているのである。その上で化政・天保当時の代表的な二冊の著書からの引

用が叙述を生々と同時代的に支えるものとして採用されている。その抑制を無知と取り違える者がいたとしたら、それは救い難い「読み方知らず」と言わなければならぬだろう。引用の仕方というものはそのぐらゐ大事な意味を包含するものであり、引用の取捨に際して働く、「知識の店開き」に対する抑制こそが叙述の象徴的要約性を保証するものなのである。」

田口富久治氏から、新著『戦後日本政治学史』を送っていただいた。総計四七〇頁、ずつしりと重い。私はちようど、国際会議用の英語原稿をかかえ呻吟していた。いくつかの論攷は初出で読んでいる。とりあえずの御礼とホームページ上の宣伝のみにして、後でじっくり味わってみようと思っていたところに、「葦牙」同人山根猷氏から電子メール。次号に入りたいので二週間で書評を書け、という。英語論文の締切と重なりいったんお断りしたが、メール入稿なら遅れてかまわないから是非書けという。引き受けていったん読み出したら止まらない、面

白いのである。政治学者にとつては、博引強記の百科全書であり、文献データベースであり、学会ハンドブックになる。丸山真男論として読むのが本筋だろうが、日本政治の構造論としても面白い。私の英語原稿は、中断してしまつた。

戦後日本の政治学は、丸山真男「科学としての政治学」（一九四七年）から出発した。「スタート台」「知的共有財産」としての丸山と辻清明から、福田敏一、京極純一、福島新吾、岡義達、永井陽之助、石田雄、神島二郎、升味準之輔、篠原一、足立忠夫らによる「戦後政治学のルネッサンス」「百花斉放」へと読み進み、「戦後政治学の新展開」を松下圭一から高島通敏へとつなぐ藤田省三のところまで、詰まってしまった。藤田の「経験」概念の実践的・論理的・認識論的含意を森有正のそれと比較対照する知の課題を提示された上に、冒頭に引いた藤田「市村弘正『都市の周縁』をめぐって」に「書評の名手として知られる著者がものした書評の白眉の一つ」と注釈がつけられ、「書評とはこのように書きたいものであ

る」とある。深読みすれば、本書のありうべき書評への著者田口氏の注文であり、鈍感で軽率なアカデミシャンへの伏線である。なにしろ本書索引に登場する日本人研究者は三百人余、さらに外国人が百数十人。主題的に論じられるのは、著者自身が梁山泊の一員であつた新制東大法学部政治学研究室の丸山から高島への多元的流れと、「新しい流れ」としての「戦後政治学の変貌と『レヴアイアサン』の登場」とはいえ、参照著作・論文は数千に及び、それは数万の中から「ちやんと取捨選択されている」。

そのうえ本誌「葦牙」は、「文学と思想の雑誌」である。概要を紹介して一言という新聞書評風では済まない。学会的論点を抽出し専門的コメントを付すという同業組合的レビューもふさわしくない。いや、藤田省三水準の書評を所望されたら、紹介とコメントの双方を昇華したうえで、「思想的彫りの深さと鋭さ、およびリリックでの確な表現」（田口氏の藤田評）を求められる。そんな「文学的」レビューは、もちろん私の手に余る。

だからここでは、田口氏の厳しい学問的篩をくぐって、私自身もポジティブに言及された唯一の領域、インターネットを駆使する手法もとれない。国会図書館が一九四八年以降今日まで受理した約二百万件の文献中で、「政治学」のタイトル名で検索できるのは一〇〇二件、「丸山真男」は六六件、著者名なら「田口富久治」は「丸山真男」六二件と全く同数で、まだ本書は登録されていないから、本書で田口氏の著訳書数は丸山を越える、といった書誌学的計量分析はやめておこう。「華牙」読者にとつてもレレバントな、したがって専門外の人々にとつても意味あるいくつかの断片を、私的に切り取ることにした。

戦後日本政治学史について論じた書物は、田口氏の本書が初めてではない。本書第二章「戦後政治学史への諸アプローチ」で論じられるように、図書新聞編「日本の学問」（一九六七年）の福島新吾・升味準之輔に田口氏自身の加わる座談会から、私が昨年大学院ゼミで用いた大嶽秀夫「戦後政治と政治学」「高度成長期の

政治学」（東大出版会、一九九四・一九九九年）まで、いくつかの試みがある。こうしたサーベイは大学院生や留学生にとつて有益で、私自身はこれまで、三宅一郎・山口定・村松岐夫・進藤栄一「日本政治の座標」（有斐閣、一九八五年）と大嶽秀夫の併読を勧めてきた。本書は、田口氏の前著「日本政治学史の源流」（未来社、一九八五年）、「日本政治学史の展開」（同九〇年）に続く戦後編で、三著により二〇世紀日本の政治学の概観が完成し、華麗な鳥瞰図が得られることになった。

本書に登場する主要な政治学者には、略歴と著作目録が付されている。頻繁に登場するのは「現代日本朝日人物事典」（朝日新聞社、一九九〇年）の記述である。実はこの「事典」の田口氏の項は、私が書いた。「たぐち・ふくじ 政治学者。秋田県生まれ。一九五三年東大政治学科卒。東大法学部助手、明大政経学部助教授・教授を経て、七五年より名大法学部教授。戦後日本の代表的なマルクス主義政治学者として知られ、国家論、現代政治分析、比較政治、行政学、日本政

治学史など多方面で活躍。自民党・高級官僚・財界の「三角同盟」論や、国会・地方自治体・労働運動の「階級闘争の三つの舞台」等を問題提起した。「社会集団の政治機能」（六九年）、「マルクス主義政治学の基本問題」（七一年）、「先進国革命と多元的社會主義」（七八年）、「現代資本主義国家」（八二年）など著訳書多数」と。書名にひとつ、誤りがある。本書のように使われるのなら、違った書き方がありえたと反省させられる。こうした短文でこそ「叙述の象徴的要約性」が問われるのだから。

私たちの世代の読者ならば、本書には直接出てこない田口氏の著作・論文で、サーベイを目にした人も多いだろう。私の場合でいえば、「事典」に誤記した「マルクス主義政治理論の基本問題」（青木書店、七一年）と「現代政治学の諸潮流」（未来社、七三年）であり、より広く読まれた共著「政治の科学」（あゆみ出版、七二年、青木書店、七四年）や編著「講座 マルクス主義研究入門」2 政治学」（青木書店、七四年）であった。そ

ここでは「戦後日本の政治学」の対立軸が「近代政治学とマルクス主義政治学」と設定されており、田口氏は、後者「マルクス主義政治学」の自他共に認める旗手であり、リーダーだった。学生時代の私田口氏と初めて会ったのは、おそらく「現代政治学の諸潮流」巻頭に掲げられた「現代の日本と政治学の課題」のもとになった小研究会の場で、「マルクス主義政治学」の参考文献の第一に、当時愛読していた芝田進午「人間性と人格の理論」（青木書店、六一年）が挙げられていたのが、印象的だった。そんな未完の発展途上領域なら、学生運動に没頭して、丸山真男以外はマルクス、レーニン、グラムシ、野呂榮太郎でばっさり切ってきた私のような者でも近づけるかな、と生意気にも思ったものだった。

その芝田進午氏の「予研裁判」途上での訃報に接してこの書評を書き始めたのも、なにやら因縁めくが、一九七〇年頃の田口氏が、批判対象たる「近代政治学」中に位置づけていた非マルクス主義政治学が、本書では「戦後政治学」として論

述の骨格をなし、その「批判精神」「普遍的原理」の抽出・擁護・継承が、ボスト・モダン派の丸山真男批判（山之内靖・酒井直樹・姜尚中ら）やアメリカ留学（猪口孝・大嶽秀夫・村松岐夫ら）との対比で、本書の基調となる。これは、どうしたことか？

性急で軽率な読者ならば、これを著者の政治的・方法的立場の変更ないし「転向」と見るだろう。しかし注意深く読めば、七二年の「戦後日本の政治学」でも、諸潮流を統一戦線に対する政治的志向の軸と史的唯物論に対する方法論の軸を交差して四つのグループに分け、田口氏自身の属する「マルクス主義・統一戦線派」の第一任務は、「統一戦線を志向する非マルクス主義政治学との政治的協力と学問的相互批判」に措定されていた。本書で主要に論じられるのは、いわゆる「行動論政治学」でも「現実主義者」でもなく、かつての「非マルクス主義・統一戦線派」の系譜であり、叙述のはしげいで、その「政治的協力と学問的相互批判」の

エピソードが語られる。藤田省三や高島通敏の「転向」研究は、それ自体「戦後政治学」の成果として高く評価され、「転向」概念そのものが歴史的に扱われる。藤田の「日本の共産党等の中でスターリン主義的傾向が『運動』を実質的に動かしたのは、皮肉にも戦後の解放後なのである」という指摘に注目し、高島の「運動の政治学」の生成根拠を述べる文脈に、著者自身の現時点での「転向」観を読みとることができる。

いや「行文の一行一行の中に包み込まれている含意の程」をとるならば、丸山から高島にいたる「戦後政治学」の担い手たちは、その理論・方法と政治的志向の歴史的展開が精査されながら、その個性と思想的・一貫性が確認され、尊重されている。たとえば松下圭一の理論的堂為の内に、その大衆社会論からシビル・ミニマム論、政策的思考論への軌跡にラスキの影響を、その一貫したバックボーンとしてロックを見出す。肝心なのは、その理論展開の思想的根拠であり、それを定立する哲学である、と読める。田口氏

自身にあつては、おそらくそのバック  
ボーンは、イズムと化した「マルクス主  
義」ではなく、生身のマルクスであり、  
ウェーバーであり、丸山真男であつて、  
その点では見事に一貫している。

田口氏は、自称「マルクス主義政治学」  
や「レヴァイアサン」グループには、そ  
うした思想的意味を見出し得なかつたの  
だろう。むしろそれを、「行動論政治学」  
の先駆者に擬された京極純一や、地味な  
行政学者と目される足立忠夫の丹念な読  
み込みによつて発掘する。京極の「自然  
村における権力の権威への移行」の論理  
とマルクス「資本制生産に先行する諸形  
態」が相補的に対照され、足立の「市民  
の生活領域」九区分にハーバーマスの公  
共性や松下シビル・ミニマム論を補強す  
る「受忍のシビル・マキシマム」を読み  
とる。石田雄の「組織の各成員の間で共  
同の組織目的が抽出される過程」の論理  
に疑問を呈した上で、「反体制組織や運  
動の側においても、特殊な形で組織へ  
の同一化・忠誠が強く要請される状況に  
おいては、象徴の情動的機能も広汎に動

員しなければならず、規律の自己目的化  
の危険もまた生れてくること、マルクス  
主義における「理論と実践との統一」と  
いう原則が、現代社会においては情動的  
機能による同調性強化を合理化する手段  
とされる危険性の大きいことに十分注目  
しなければならぬ」という創見を評価  
する。あざやかである。

本書では、論じる対象が著者田口氏の  
恩師・先輩・友人が大部分であるが故  
に、本文中にも「私」がたびたび登場し、  
専門外の読者にもなじみやすいものにし  
ている。「戦後政治学」を論じながら、  
実は田口氏自身の思想的軌跡と格闘が、  
行間にはじみでている。つまり本書は、  
師である丸山真男から同期の高島通敏の  
歩みまでを鏡とした「田口政治学」の自  
己省察であり、「自己内対話」なのだ。「自  
己内対話」には痛みを伴う。「魂なき学  
問」からは省察は生まれえない。結びで「戦  
後政治学」系譜の最新刊である小林正弥  
『政治的恩顧主義論』（東大出版会）を引  
きながら、「実践的・規範的政治哲学な  
いし公共哲学の樹立」を今日の緊急な課

題とするのは、「戦後政治学」とは丸山  
を出発点とした「民主主義政治学」であ  
つたことを再確認した、田口氏の到達点  
なのだろう。本書の手法を借りていえば、  
本書と同時に刊行された立命館大学「政  
策科学」八巻三号（田口教授退任記念論  
文集）に収録された最終講義が、「二一  
世紀における社会主義と日本国憲法の命  
運」であることも、それを傍証する。「現  
存した社会主義」とは異なる「思想とし  
ての社会主義」は、彼岸にはなく、丸  
山真男の「民主主義の永久革命」の圏内  
に生まれ、脈打っていたのである。

したがって、かつては「近代政治学」  
の彼岸に構想された「マルクス主義政治  
学」は、本書では末尾の「小括」におけ  
る「間奏曲」としてのみ、明示的に語ら  
れる。「ここで間奏曲風に、戦後日本政  
治学におけるマルクス主義の潮流の命運  
について一言しておく必要がある」と  
して、一九五〇年「年報政治学」創刊号  
座談会で、「史的唯物論と近代政治学の対  
決」が語られた時期から、「一九五四年  
頃から一九六二年頃までの学会出席者の

大雑把には三分の一がいわゆる「マルクス主義的傾向」の左翼」であったピーク期を経て、七〇年代後半から「マルクス主義政治学（者）」を自称する学会員は少なくなり、八〇年代には、皆無に近くなり、いわゆる学会政治における影響力も、おそらく完全になくなっている、「コミンテルン型共産主義運動の崩壊と九三・九四年の日本共産党の丸山真男批判により」「マルクス主義政治学派」が再建される可能性はかぎりなくゼロに近い」と率直に吐露される。そこではさらにと触れられるのみだが、その没落への転換点、実は著者自身を一方の当事者とする「八〇年頃の『不破・田口論争』の経験」にあったことは、私たちには周知の事実である。その頃田口氏に勧められて「マルクス主義政治学派」の末端に入り、数周遅れのランナーの一人になった私にとっても、「身につまされる話」である。

しかもこの間奏曲は、最終楽章で独奏されるにしても、本書の全体にわたって、執拗低音としてリフレインされる。『草

牙』読者ならば、学問的に禁欲した叙述の行間に流れるそうした調べに、深い感銘を受けるであろう。「経験」を共有した者のみが感得しうる重みと同感をもつて。もつとも田口氏が述べる「マルクス主義」の窮状は、政治学に限ったものではない。前出「講座 マルクス主義研究入門」には、田口編政治学のほかに、芝田進午編哲学、金子ハルオ編経済学、永原慶二編歴史学が入っていたが、いずれの学会でも「マルクス主義」を自称する者はゲッターに追いやられ、学会ナショナルセンターレベルでの再建可能性は「かぎりなくゼロに近い」。七〇年代に私たち「団塊の世代」を知的に魅了した「現代と思想」誌が本書に一度も登場しないのは、そうした「食い逃げ世代」（金子勝）の思想的責任を問う、暗黙のメッセージとも読める。つらいところである。

だとすれば、私たち「遅れてきた世代」のなすべきことは、その「敗北」の根拠をさぐる作業となる。そうした作業は、「戦後政治学の英雄時代」の一翼にあり、自らの政治学体系から学史・行政学・民

族論にいたる各論までものされた田口氏とは、同じ課題設定ではありえない。田口氏と同時に定年を迎えた法政大学の高橋彦博氏も「戦間期日本の社会研究センター」（柏書房）と題する重厚な著作を公刊されたが、そうした先学に学びつつ、再び藤田省三の華麗な筆致を借りれば、「現実から取り出された断片の並べ方次第で断片の生まれ変わり」と新たな全体像の誕生がもたらされるのは、人間社会に固有な歴史的考察の特質に他ならない」のだから、「今の日本の圧倒的な超実利主義的空気の中で、『現実には絶えず敗れながら』、その敗北という重要な経験を経験することを通して一つの世界を切り開いていく『劣者の劣位性』の可能性と世界形成性」に着床してゆくことだろう。

田口氏は本書を、本書の前史である「日本政治学史の源流——小野塚嘉平次の政治学」に続いて、「ゼミ生の私が少しずつ『左傾』しつつあることを察知されながら、同僚教授のクレームに抗されて、私を助手に採用して下さった」故堀豊彦教授に再び捧げている。異例のことであ

る。だがそのような師弟関係も、「政治学」という学問が「成長産業」でありえた二〇世紀日本という特異な時間・空間の産物であるのかもしれない。だから、いまだに「政治学者」と名乗るののために、らいを持ち、主題に「政治学」と銘打つ

単著を一度も書けずにいる不肖の弟子としては、「現代日本人物事典」二一世紀版には本書を真つ先に挙げることを約すのみで、本格的な「田口政治学」の論評は、他日を期す以外にない。  
(東京大学出版会、定価五八〇円十税)

## 死者との対話が紡ぐ受難と復活の物語

大江健三郎著『取り替え子 チェンジリング』

### 山根 献

「おれは向こう側に移行する」と(伊丹十三)がいった後、ドシンという大きな音が録音されているテープを、古義人(大江)が田亀(ヘッドフォン)を通して聴いている。そこに、吾良の妹である古義人の妻・千樫が——吾良が自殺しました、と知らせにやってくる。そんな場面からこの小説は始まる。この墜落死事件の後、ジャーナリズムから逃れるように古義人は、講義を受け持たないかと

いう誘いによつて、ベルリン自由大学にでかける。その百日間の *vacation* (隔離)をはさんで、吾良が遺していったカセットテープと、シナリオや絵コンテを通して、吾良との対話がつつけられる。ダンテの「神曲」さながらに、肉体を離れた死者の魂との対話が成立する大江独特のクロノトポス(内面世界の時空間)がここに作り上げられている。この時空間を介して、吾良と過ごした青年時、二

人が共有した経験が反芻される。十七歳の古義人と十八歳の吾良は小林秀雄訳のランボオの散文詩に惹きつけられたが、その陶酔の仕方に早熟な二人が共有した経験の内実は示されていた。古義人は、このようにして過去の青年時の諸経験に立ち戻り、そこに新しい感情のひらめきを感じ、その感情に含まれていたこれまで知らなかった新しい意味を発見し、それによつてあらためて新鮮な勇氣を手に入れてゆく。そして吾良の死が、物語の「終り」ではなく、生の「始まり」の物語になつてゆくのである。吾良との対話を通して古義人は、過去の一連の出来事に一貫性をもつた意味が含まれていたことに気付いてゆく。

吾良には暴力団に襲われた経験があり、二名のヤクザに襲撃され、頸を刺されていた。古義人には、かつて右翼少年の暗殺事件を題材にして「政治少年の死」(『政治少年死す』一九六一年——カッコ内は実作品名)を書いた直後、脅迫された経験があり、現在もなおその小説は全集に収録されていなかった。その後も